

② 男性更年期・LOH 症候群診療における

「証」からみた患者背景

長野赤十字病院泌尿器科

天野 俊康、高澤 拓哉、栗田 繕雅、今尾 哲也

【緒言】男性更年期・LOH症候群に対する治療法のひとつとして漢方薬が挙げられる。従って、男性更年期・LOH症候群受診者の「証」を検討することは有用である。今回、当科へ男性更年期・LOH症候群の診断、治療のため受診した患者の「証」を判定し、他の臨床的パラメーターと比較検討を行った。

【対象と方法】当科に男性更年期・LOH症候群の診断、治療のため受診し、初診時に実虚問診票による実虚スコアより「証」の判定が可能であった629名を対象とし、「証」と他の臨床的パラメーター（年齢、勃起機能、AMSスコア、総および遊離型テストステロン値）との比較検討を行った。

【結果】629名の平均年齢は、 54.3 ± 10.4 歳で、実虚スコアは 47.4 ± 11.3 であり、虚証（実虚スコア0-44）265名（42.2%）、中間証（45-55）226名（35.9%）、実証（56-100）138名（21.9%）であった。実虚スコアは、年齢（ $p < 0.0001$ ）・勃起機能（SHIMスコア）（ $p < 0.0001$ ）とは有意な正の、AMSスコア（ $p < 0.0001$ ）とは負の相関関係が認められたが、総および遊離型テストステロン値とは相関関係は認められなかった。重回帰による検討でも、同様な結果であった。以上より、男性更年期・LOH症候群における「証」の判定により、若年者ほど虚証であり、虚証であるほど有意に勃起機能が低下しており、LOH症候群の症状が強く出ていることが判明した。しかしながら、血中男性ホルモン値とは相関は認められなかった。

【考察】男性更年期障害は、1.精神・心理症状、2.身体症状、3.性機能関連症状といった特徴的な症状がいわゆる更年期前後の男性に起こる状態とされ、うつ病とのオーバーラップもあり、その原因は必ずしもアンドロゲン低下のみで起こるわけではない。LOH症候群は、加齢によるアンドロゲンの緩徐な低下に伴う症状を呈する状態とされている。しかしながら、実臨床においては、種々の症状に悩まされている多様な背景を有する受診者が多く、各々の状態を判断して、迅速に適切な治療を行うことが重要である。診断には、AMSスコアなどによる自覚症状の確認と男性ホルモンの採血が必須である。実虚スコアによる「証」の判定は、AMSやSHIMスコアと有意に相関しており、さらに本人の「証」を基に初診時から漢方治療に繋げることができるため、有用性は高いものと考えられた。また、男性更年期・LOH症候群患者において、その症状と男性ホルモン値との相関がないことは多数報告されており、本受診者層の非均一性、背景の多様性を示していると考えられる。「証」の判定は自覚症状を基にしており、AMSスコアと同様、やはり男性ホルモン値との関連性はなかった。